

## 送別の辞

### 宇波彰教授の退職にあたって

金 沢 英 之

宇波先生は二〇〇一年四月より札幌大学に赴任された。私が新米教員として札幌にやって来たのはさらに遅れて二〇〇三年四月のことなので、先生と同じ職場で過ごすことができたのは僅か二年に過ぎないが、たまたま私の祖父が先生の大学時代のひとり目の指導教官(宇波先生は一度仏文学を修められたのちさらに哲学を専攻されたので、指導教官がふたりいるのである)だったという奇縁もあつてか、ことのほか親しくおつきあいさせていただいた。

この一文を草している時点で、先生はちょうど私の倍の年齢にあたる。普通ならば親子以上の年の差にもかかわらず、不遜な表現を許していただければ、宇波先生は私にとってたいへん「気の合う」存在だった。もちろん、先生が若輩の私に合わせてくださった面は多々あつたのだろうが、そればかりではなく本当に驚くほどの若さを、心身ともに持たれていた。毎週、東京から飛行機で札幌まで通うスケジュールをもとせず、夜中に札大正門前の店でラーメンをすすりながら、「僕は昨日の夜は本を読んで一時間しか眠らずに、朝一番の飛行機でこちらに

来たんだけど、全然眠くないんだよ」と言って笑っておられたこともあった。そんな体力も驚異的だったが、同時に頭の柔らかさ、知的好奇心の旺盛さも抜群だった。先生が札幌にいらしている時は、仕事帰りなどに何度も飲み誘っていたことがあった。そうした酒の席で口にした話題を誰よりもよく憶えているのは宇波先生だった。そして知らない話題やわからない言葉などがあれば、たちどころに調べをつけ、翌日お会いした時には「あの話はわかったよ」と教えてくださるのだった。その調べ方も、辞書や本と首っ引きになるだけでなく、電子辞書やインターネットも駆使した、実に軽やかなものなのである。

インターネットと言えばこんなこともあった。先生は旅行がご趣味で、世界中行ったことのない地域はないほどあちこちを飛び回っておられるのだが(実際、これを書いている現在もイエメンに旅行中のはずである)、行った先々でその土地の新聞の購読契約を結び、日本まで送らせて世界中の情報に目を配っておられたのだという。そのため一時は数十紙の新聞が自宅に届けられていたが、今は全部インターネットで見られるようになったおかげで新聞はとらなくてもよくなったとおっしゃり、パソコンの画面で次々と各国のニュースをブラウズしてみせてくださった。

そんな若さもひとつの要因だったのだろう。先生はことのほか学生から慕われる教師であった。授業が終わったあとの先生の研究室には、学部学生や院生が連日のように集まっていた。加えて多数の教員も学部の垣根を越えて顔を出していたし、飲み会ともなると職員の方々まで加わることもしばしばだった。私も始終末席を汚すことになったのは言うまでもない。世間ではどう思われているのか知らないが、教員同士の酒というのと、とかく学問などとは無縁の世知辛い話題に占められがちで嫌なのだが、宇波先生と飲むときにはそのような心配は一切なく、知的な楽しみに満ちた時間を過ごすことができた。先生の学問の群を抜く膨大さ、幅広さについてはいまさら私が申すまで

もないが、その蓄積が言葉の端々に溢れているのを実感できるのは、かえってこうした機会である。こちらがどんな話題を振っても、たちまち響くように返していただける楽しさがそこにあった。反対に、先生からの質問にこちらがまごついていっていると、「そんなことも知らないのか、辞表を持つてこい！」と叱られる厳しさもあった。もちろん冗談半分におっしゃっているのだが、言われるこちらはその都度自戒を新たにしたものだ。そうした厳しさは学生たちにも容赦なく向けられていた。宇波先生の授業に出ているときがいちばん緊張する、という言葉が学生の口から聞いたことも一度や二度ではない。それでも先生の授業がつねに変わらず多数の学生でにぎわっていたのは、その厳しさが、おなじ学問を志す者に対する愛情に発し、またその裏には卓抜なユーモアが隠されていることを誰もを感じとっていたからだろう。

今年で三十七歳になる私はあるとき、ユングが、三十七歳という年齢は危機の時である、と書いているのを読み、先生が三十七歳のときはいかがでしたか、と訊ねたことがある。先生は、「僕はそのころ高校の教師をやっていて、毎日暇で近くの川に行ってはドジョウを捕まえて、鍋にして食べたりしていたよ。でもちようどそれくらいの年齢の時から、このままでもいいのか、と思いはじめて、それで批評などを書き始めたんだよ」とおっしゃった。

個人的に今まで長く取り組んできた仕事に一区切りがつきそうな時期で、これからまたどういった方向に踏みだそうかと考えていた私は、その言葉に励まされると同時に、宇波先生にもそういう時期があったのかと思うと、どこか気持ち軽くなるのを憶えたものだった。

おなじ時のことと記憶するが、学生が、先生がとあるインターネットのサイトにこれまで掲載されてきた書評を集め、印刷製本して手作りの和装本に仕立てたものをプレゼントとして持ってきていた。和紙を用いて丁寧に装幀

された表紙に貼られた題箋は、まだ空白のままだった。題名はどうしますか、という学生の問いに、先生はすぐさま「『ウナギの寝言』がいいな」と答えられた。ウナギ君、というのが、水泳が得意だった先生の学生時代のあだ名なのである。それでウナギの寝床ならぬ寝言というわけだ。その機転の早さと当意即妙のユーモアには内心舌を巻くばかりだった。

とりとめもなく想い出ばかりをつづってしまった。本来こうした文章には先生の大学での業績などをもっと記すべきものだろうが、今は先生とともに短くはあったが濃密な時間を過ごすことのできた幸福の記憶しか浮かんでこない。ただ、先生からなによりも学んだのは、心からの愛情と真剣さ―それは時に厳しさのかたちをとる―をもつて学生に接するその態度であったこと、それが私にとって、いや文化学部にとって、先生からうけつぐべき最大の財産であったことは申し添えておきたい。

宇波先生、どうもありがとうございました。また札幌にいらしたときは一緒に飲みましょう。